

S.B. Saul : Studies in British Overseas Trade,
1870-1914

著者	西村 閑也
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	31
号	3
ページ	90-102
発行年	1963-07-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/7511

S.B. Saul: Studies in British Oreseas Trade, 1870—1914

西 村 閑 也

第一次大戦前の国際金本位制が安定的に維持されたのは、世界の主要国のいづれもが、国際収支の構造的不均衡になやまされることがなかったからである。それでは

国際収支の構造不均衡は何故生じなかったのであろうか。

この問題は、資本輸出、国際短資移動、中央銀行の政策などの種々な方面から考察されなければならないのであるが、当時の世界貿易の構造は、この問題の解明にとって、基礎的な重要性を有するものである。S.B.

Saul: Studies in British Oreseas Trade, 1870—1914, 1960 (Liverpool University Press) は、英国を中心として、第一次大戦前の世界貿易の構造と発展とを

明らかにしようとするところみである。ソール氏はリヴァプール大学の経済史講師であり、本書は同氏の博士論文に加筆訂正したものであるが、全体の編別構成は次のようになっている。

第一部

第一章 序説

第二章 国際経済の諸問題

第三章 決済のバターン、I。世界貿易の構造

第四章 決済のバターン、II 資本輸出

第五章 トレンドと景気変動

第六章 関税と商業政策

第二部

第七章 英国の英帝国との貿易、I カナダ

第八章 英国の英帝国との貿易、II インド

第九章 英国の英帝国との貿易、III 二級結論

二

では、各章の内容を簡単に紹介してゆくこととしよう。第一章では十八世紀末以来の英国貿易の発展の簡単な概括をし、十九世紀中葉から英国綿業は新興国の競争を感じはじめたこと、生産財および石炭輸出にも変化がはじまったこと、ことに米国に対して国際収支の大巾の赤字を記録しはじめたことをのべる。第二章「国際経済の諸問題」は、前章をうけて、一八七〇年前後から一九一四年にいたる英国貿易の発展の概観をする。第一に、一八六七年〜一八七七年の間に、英国の輸入は年二七五百万ポンドから三九四百万ポンドにふえ、そしてこの輸入の急増は主として食料品輸入の急増によるものであったため、一八七七年には、食料輸入が原材料輸入を上回るにいたったことが指摘される。これに反し、対米輸出は、すべての品目について減少し、又対欧輸出は、品目によってまちまちのうごきを示した。しかし米国、ヨーロッパ以外の地域への輸出はふえつづけた。だから大不

況初期の英国の輸出貿易の将来は悲観的なものではなかった。

ところが大不況後期から第一次大戦直前までの期間には、事情は根本的にちがってくる。第一に、一八九九年〜一九一三年の間に、世界の工業製品輸出における英国のシェアは三四%から三一%におちた。この間にドイツのそれは二三%から二七・五%へと上昇し、米国のシェアは一一・五%から一三%へとびた。ことに電気機械については、ドイツは英国の二倍の輸出をし、その他機械とくに工作機械でも英国より立ちまわっていた。とはいえ英国は繊維機械輸出および造船についての英国の優位はゆるがず、またヨーロッパ以外の国への機械輸出については英国のシェアはドイツのそれより大きい。

第二に、英国の主要輸出品である繊維製品の貿易は、後進国が自国の産業を育成するにつれて、停滞しはじめた。一八九九年に世界の工業製品貿易に占める繊維製品の比率は三三・五%だったが、一九一三年には二八・八%におちた。しかも一八九九年における英国の工業製品輸出の四七%に繊維製品だったのである。

第三に、一八九〇年ごろから米国が工業製品の輸出を

はじめた。ただ、輸出の主要品目は鋼、石油、木材製品であったので、ヨーロッパの輸出とは競合関係になく、また英国はこの市場でも、工業製品輸出については、米國を大きくひきはなしていた。だから米國の工業製品輸出は、第一次大戦前には、まだ世界貿易の構造をかえるほどのものではなかったのである。

第四に、英国は米國およびドイツから多額の工業製品を輸入しはじめた。一九一三年には英国はドイツから化学製品（一九〇万ポンド）染料（一七〇万ポンド）科学器具（七〇万ポンド）を、米國からは科学器具（一四〇万ポンド）、自動車、同部品（一五〇万ポンド）鉄鋼および機械（三七〇万ポンド）を輸入した。このことは、新規産業の分野での英国のたちおくれを示している。

以上すべての発展にもかかわらず、後進國の開発がすすみつつあり、英国の資本輸出と商品輸出とはふえつつあった。したがって、第一次大戦前の英国の経済的見透しは、必ずしも悲観的なものではなかった。

三

以上の概観をおいた上で、本書は十九世紀中葉以来の

國際貿易の經濟機構を問題とする。すなわち第三章「經濟のバタインI多角貿易の構造」では、まず第一に十九世紀中葉には、英国を中心とする三角貿易の構造がいくつも存在していたことを指摘する。すなわち、英国、西欧、バルチック諸國のそれ、英国、アフリカ、西インドの奴隸貿易のトライアングル、英国、アフリカ、米國の間のそれらである。このような三角貿易の諸グループは一八七〇年以後次第に解体して、全世界的な規模の三角貿易の構造を形造るのであるが、この發展をもたらした要因は、米國および西欧の工業化に外ならなかったのである。そして「ヨーロッパおよび北米の急速に工業化しつつある諸國は、一次産品國からの原材料および食料の購入をふやし、英国という顕著な例外をのぞけば、これらの國々に対して大巾の赤字をしるした。英国は、主としてその自由貿易政策のために、工業製品の主要な輸入國だったが、他方ではまた、ヨーロッパ外の一次産品國に対しても重要な輸出國だった。その上、英国は最大の債權國であり、しかも、いわゆる「貿易外」収支から非常に大きな収入をもっていた。こうして円環がとじられていた。一次産品國への輸出、海運、銀行業その

他のサーヴィス、および利子収入によって、英国は工業国からの輸入超過に対して間接的に支払い、これらの国が一次産品の輸入代金を支払うことを可能にしていた。」(本書四五頁)

この前提を置いて、米國、ヨーロッパ、英國の多角決済の機構が具体的に分析される。

第一に米國は、二十世紀になってから一次産品輸出國であることをやめ、工業製品の輸出と一次産品の輸入という先進國的な貿易構造を確立しつつあった。これにともなつてヨーロッパ工業諸國に対する貿易収支の黒字が大巾にふえ、英國に対しては黒字を維持した反面、非工業ヨーロッパ、インド、セイロン、ブラジル、西アフリカ、マレーに対しては赤字をふやしつづけた。ところでヨーロッパ工業諸國および英國に対する貿易収支の黒字は、これら諸國に対する貿易外収支の大巾の赤字によつて大体相殺されていた。一九〇八—一九〇九年の対英貿易収支の黒字は六九・七百万ポンドだったが貿易外収支の赤字は四六・五百万ポンドであり、工業ヨーロッパに対しては、それぞれ三七・九百万も六九・〇百万だったからである。「これゆえに、米國は、大戦直前にはブラ

ジルやインドのような國からの輸入の増に対する支払いを英國に対する黒字の顯著な増又はヨーロッパに対する赤字の減によつて行なつていたのではないことが明らかにになる。この輸入の支払いは、特にカナダやアルゼンチンに対しての大巾のそして増大しつつある貿易収支の黒字によつてなされたのである。そしてカナダやアルゼンチンは、英國に対する國際収支がますます順調になりつつあった。」(本書五〇頁)

ヨーロッパについては、特にドイツが問題であろうが、その貿易収支は、対ヨーロッパ諸國については一九〇〇年以後大巾の黒字となり、ことに英國とスイスに対する黒字は、一八九〇年の五、五百万から一九一二年には三二百万となつた。オーストリア、フランス、イタリアに対しては、一九〇〇年には赤字だったのが、一九一二年には黒字となつた。対ヨーロッパのこの黒字と貿易外収支の黒字によつてドイツは、米國、ロシア、インドその他の一次産品國からの輸入を決済した。「当時のヨーロッパの決済様式を支配していたのは、一次産品國からの輸入の急速な増加、しかもヨーロッパの一次産品國への輸出増を大巾に上まわつていた輸入増であつたこと

は、たしかである。」(本書五二頁)とくに英帝国内諸国に対しては、ヨーロッパは資本輸出をしていなかったの
で、ヨーロッパがこれらの地域からの輸入をふやすと、
貿易収支の赤字が、そのまま国際収支の赤字となって反
映したのである。

以上の多角決済のシステムの中心が英国だった。英国
の貿易収支は一八七二年以後大中の赤字を示し、大不況
期にも輸入がふえつづけたので、英国に債務を有する諸
国の国際収支の危機がさけられた。一八八〇年には英国
のヨーロッパおよび米国に対する商品および金貿易の赤
字は、それぞれ四〇・五百万ポンド、六四・九百万ポ
ンドだった。そして貿易外収支の黒字を考慮するなら、こ
の両地域に対する経常的の赤字金輸入七〇万ポンド程度
であろう。そして一八八〇年是不作の年であるから、こ
のころの平常年の赤字は六〇百万くらいと推定される。
そして世界の他地域に対する商品貿易の赤字は一四百万
である。これに対して、英国はインドから年八百万ポ
ンドの利子収入、送金その他収入八百万、貿易収支の黒字
六・九百万と約二五百万ポンドの受取超過をもった。こ
れゆえに、英国はヨーロッパおよび米国に対する赤字の

三分の一以上をインドに対する黒字によって決済してい
たのである。インドについては南米に対する黒字が大き
く、トルコと日本に対しても黒字を有していた。

一九一〇年にはヨーロッパおよび米国に対する国際収
支の赤字は九〇百万、九五百万になり、その反面イン
ド、中国、日本、トルコに対する黒字は大中にふえたの
で「かくしてヨーロッパとアメリカに対する主要な決済
は、極東を経由していた。」(本書、六〇頁)そして南米
に対する国際収支の黒字はこのころまでにはほとんど消
えていたので、極東に対する英国の黒字は、全世界の決
済機構の枢軸となったのである。

そしてインドの輸出品は、米国およびヨーロッパ諸国
の関税障壁とは関係がなかった。一九五〇年には、イン
ドのドイツへの輸出品の四分の三、フランスベルギーへ
の輸出の全部、オーストリアへの輸出の七〇%、米国へ
の輸出の半分が関税なしで受入れられた。

だから、第一次大戦直前の多角決済の機構は、(1)米国
およびヨーロッパの一次産品輸入の増加、(2)英本国の英
植民地に対する国際収支の黒字の二本の柱によってささ
えられていたのである。だからまた、英国は保護貿易と

帝國特惠關稅を採用することはできなかったのである。

もしそれをしたならば、ヨーロッパと米國は原料品の供給地を英帝國から、その他の國に轉換しようとしたであろうし、轉換しきれない分については、英帝國への輸出をふやして決済しなければならぬから、英帝國での外國の工業製品の競争はかえって激化したことであろう。だから、英國の自由貿易は、世界貿易の拡大と、英國自身の發展を可能にしていたのである。

四

第四章「決済のパターン、II 資本輸出」では、資本輸出による資本勘定面での赤字が、資本輸出にともなう商品輸出の増による貿易収支の黒字によって相殺されるとし、これが海外投資の實際のトランスファアの機構だった、としている。そして、対外投資ブームのさいには、英國自身の輸入もふえるが、大ていの借入國の限界輸入傾向は英國より高いので、英國は、輸入の増を上まわる輸出の増を実現しえたわけである。

以上の前提を置いて、本章は、アルゼンチン、オーストラリア、ブラジル、インドに対する資本輸出とそのトランスファアのメカニズムを統計的に分析する。

S. B. Saul: *Studies in British Overseas Trade, 1870—1914*

第一に、アルゼンチンについては、英國の資本輸出は英國の対アルゼンチンの資本財輸出をふやすが、英國からの資本輸入による建設投資は、アルゼンチンの國民所得をふやし、したがってアルゼンチンの消費財輸入をふやす。しかし、消費財輸入の相手國は英國ではなく、ヨーロッパ諸國である。ところが一九〇七—一九一三年の間に、この決済様式は根本的に變化する。この間に英國の対アルゼンチン輸出は九・二百万ふえたが、同國からの輸入は四八・四百万もふえたからである。これは主として英國の食料品輸入先が米國からアルゼンチンに轉換されたためであるが、このため英國の対アルゼンチンの國際的収支黒字はきえてしまった。その上、英國の資本財輸出は外國の競争のため大巾にへってしまった。

オーストラリアへの資本のトランスファアは、アルゼンチンとは非常にちがっている。第一に、九〇年代までは、オーストラリアは英國以外の國とほとんど貿易しなかったのが第三國を通ずるトランスファアは不可能だった。第二にオーストラリアへの資本輸出は、アルゼンチンへのそれとはちがって、あまり大巾に變動しなかった。第三に、オーストラリアはむづかしくなった。第三に、オ

イストラリアへの資本財輸出は、米國ドイツとの競争にさらされることがなかった。とはいえ、一九一二―一三年には、外國の資本財産業の競争がはじまった。

インドについては、アルゼンチンおよびオーストラリアの兩國とは、全くちがった様相がみられる。インドへの資本輸出の増減にかかわらず、國際収支は順調になっていた。そして「もしも英國の輸出品、とくに綿製品が、大戰勃発前の数年間にインドで広い市場をもたなかったならば、英國がアメリカ大陸その他にあれば多額の投資をすることは不可能であつたであらう。」(本書八八頁)

五

第五章「トレンドと景氣變動」は第四章までの分析を景氣循環との関連において再構成したものであり、本書の中でもっとも重要な、そして興味ふかい章である。

本章ではまず最初にロストウの大不況についての仮設が問題とされる。ロストウは、国内投資Ⅱ生産的投資は生産力効果がすぐにあらわれるから、価格下落と実質賃金上昇をもたすが、戦争および海外投資Ⅱ非生産的投資は、物価の上昇をもたらずとし、生産的投資と非生産

的投資とが交替するから、コンドラティエフ・サイクルが生ずるとしている。一八四八―一八七二年には戦争および金鉱発見が多かったのに、一八七三―一八九六年には、それがあまりないのは事實である。しかしこれだけから片道二五年のサイクルを實証するのは無理である。大不況期中も国外投資と国内投資とは交替して生じている。また八十年代初頭のブームをロストウは例外としているが、もしこのブームを考えに入れるなら、大不況は七〇年代と九〇年代前半の現象となり、統一した理解はできなくなる。また国外投資と国内投資とは短期的には相ともなつてうごいており、反対の方向にうごいている事例は少ない。ことに造船業における投資は海外投資とまったく並行してうごいている。造船の好況↓運賃下落↓貿易拡大↓海外投資増という関連があつたからである。かくして、もしも海外投資と国内投資とが交替するとしたならば、それは、主として家屋建設と地方自治体の支出の變動によつて生ずるものである。

かくて(1)一八七三年までの海外投資、造船ブーム、(2)一八七三―七九年の家屋建築ブーム、(3)一八八〇年代の海外投資ブーム、(4)一八九〇年代前半の国内、国外投資

スランプ、(a)一八九五年以後の国内投資ブーム、(b)一九〇五—一九一〇年の国外投資ブームというサイクルなら検出しうるが、長期サイクルの存在については断定しえない。そして大不況そのものについていうと、一八七〇年代の不況と九〇年代前半の不況の間には、いわば構造的ともいふべきちがひがあるのである。

このちがひは、七〇年代の不況では、全般的な不況にもかかわらず、一次産品国のどれかは活況であり、そこへだけこの英国の輸出はふえたが、九〇年代の不況は、まさに全世界的な不況であったという点にある。「ある程度までは、これは他の所で工業化の成長が英国の輸出をより限界的な状況においた、——たとえばインドにおいて——という事実によるものであらう。しかし、世界経済における英国の地位を全くかえはじめていたところの、根本的で、全般的な諸力がはたらきはじめたのだということの方がありうることである。」(本書一〇九頁)

このような変化は、実はより基本的には、世界の多角貿易構造の変化によって生ぜしめられたもののなのである。七・八〇年代以前には、世界には多角貿易のいくつ

もの自己封鎖的なネットワークがあり、これらネットワークは、英国を通じて相互に關係を有していたにすぎないのである。だから、たとえば米國で不況が発生しても、それがオーストラリアに不況をひきおこす、というようなことはありえなかった。なぜなら、米國はオーストラリアとほとんど貿易をしていなかったからである。もしアメリカの不況がなんらかの影響を及ぼしうるとするなら、それは米國の不況↓英国の輸出減↓英国の所得減↓オーストラリアからの輸入減という関連がありうるかぎりである。しかも、もし英国が对外投资の流れを不況の米國からオーストラリアに転換するならば、オーストラリアではブームが生じるであらう。かくして、「英国は、その資本輸出の方向をかえることによって、世界のある地方のスランプの影響から自らをある程度まで、そして他の國々を大中に、隔離することができた。」(本書一一二頁)のである。そして、このような世界貿易のシステムの中で、ヨーロッパはまだ重要な役割はなっていないかった。その貿易はヨーロッパ内の多角貿易が主であり、資本輸出の相手國もヨーロッパ内部にあったからである。

ところが、九〇年代までには、これら自己封鎖的なネットワークは、融合して、単一の全世界的な多角貿易のシステムに発展した。オーストラリア、ニュージーランド、インドの輸出相手国としてのヨーロッパおよび米国の比重は大きくなり、イギリスの世界貿易の中心地としての地位はゆらぎはじめた。これにともなう、たとえば米国の不況はオーストラリアその他に直接に影響を及ぼしはじめた。そして、英国の海外投資の方向をどう転換しても、世界不況の発生をくいとめることは不可能となった。九〇年代の不況が、全世界的なものとなり、価格の異常な下落をともなつたのは、まさにこのような構造的変化があつたからである。

この変化に応じて、一八九五年以後の景気回復は、英国の対外投資によってひきおこされたものではなくなつた。それは、英国、工業ヨーロッパ、米国の国内投資によつて主導されたブームである点で注目しに値する。

一九〇五年からは、英国の対外投資に主導されたブームがはじまるが、このブームは、十九世紀における対外投資主導ブームとはいろいろの点でかつてゐる。ことに一九〇九年—一九一三年は注目すべき特長を有してい

る。第一にヨーロッパおよび米国の発展のため、米国およびヨーロッパ向の英国の輸出は、ブームにもかかわらず、一九〇七年の水準にまで回復してゐない。ドイツの英国からの輸入は一九〇七年に四一・四百万ポンドだったが、一九一三年には四〇・七百万にしかなくなつてゐない。石炭輸出も、船舶輸出(除軍艦)も繊維機材輸出も停滞した。その反面、米国およびヨーロッパの一次産品輸入が大巾にふえ、一次産品国のブームが生じたので、英国の一次産品国向輸出はふえた。そしてこの輸出の主軸は、綿布と鉄鋼だった。「一九〇九年から一九一三年の間に、ヨーロッパ市場に主として依存する輸出ののびなやみが、大戦直前の年代のもつとも不吉な兆候だつたであろう。それまでは部分的には石炭輸出ののびのため——けつしてそれだけによるのではないか——ヨーロッパ向の英国輸出はよく維持されてゐた——とくに他の地域が不況の時はいからである。」(本書二二八頁)

そればかりか、すでにアルゼンチンの例でみたように、後進国への資本輸出が、英国の資本財の輸出を促進するという関係が、次第にみられなくなつてきた。米国およびヨーロッパの資本財産業の競争がはじまつたから

である。

このような世界貿易の構造的変化をもとにするなら、いわゆる大不況は、一八八六年で前半と後半にはっきりわけられることになる。九〇年代の不況は、リーアルなタイムにおいて減少を示し、八六年以前の不況は、そういうことはないからでもある。そして、一八七三—八六年の不況と九〇年代前半の不況との間には構造的な差があるのであるから、長期サイクルの存在は証明しえないことになる。

六

第六章「関税と商業政策」は、外国の保護関税が英国の各産業におぼした影響を概観したのち、関税のおぼした影響を過大評価するのはまちがいであるという結論に達する。アメリカ、ドイツの諸国に対して英国が貿易収支の赤字をもつにいたったとき、英国は英帝国に対し、又南半球のその他の国に対して貿易収支の黒字をもつようになり、「かくして、世界貿易の構造は、関税の型に、自らを適合させ、関税障壁の世界貿易の量におよぼす影響を最小限におさえた。」(本書一六四頁)からである。

七

以上で一般的な概括のための第一部はおわり、ついで英帝国内貿易の構造を問題にする第二部がはじまる。すなわち第七章でカナダ、第八章でインドをとりあげ、第九章で一般的結論をまとめる。

第七章では、まずカナダの英国への主要な輸出は、初期には木材だったが、この地位は木船の衰微とともに、小麦にとって代られ、ついで米国の小麦輸出の発展は、主要な輸出品を小麦から酪農品に転換させ、二〇世紀に入って米国が小麦輸出をやめると、主要輸出品はふたたび小麦となったことを明らかにする。この間に米国への輸出も木材、鋳石を中心に大巾にのびた。「これゆえ、時として考えられているのとは反対に、一九〇〇年以後の多角決済の広汎な発展は、英国へのカナダの輸出の拡張によってよりは、カナダの輸入のパターンに生じた変化によって説明される。というのは、米国への輸出はより急速に増大したからである。」(本書一八〇頁)米国への輸出ののびを上まわって米国からの輸入がふえた。しかもカナダの発展にもなつて資本財への需要がふえたが、この需要は主として米国の産業(地理的な優位性を

有する）によってみたされた。そして、英国からの纖維製品や食料品輸入の比重は低下していった。金屬製品における米国の優位は、九〇年代に確立されてからくつがえされなかった。そして帝國特惠關稅をもうけても、英國にどれだけ有利になったかは不明である。

その反面、カナダの製造工業は目ざましく發展し、英國の他の諸國に対し機材を輸出しはじめた。「カナダは帝國内への、明らかに外國の競争に非常にさらされやすい輸出品である工業製品の輸出國としてユニークな地位を占めていたので、自國の保護貿易体制を、自國の工業製品ならびに一次產品の海外市場にまで拡張することは、もっとものぞましいことだった。そのうえにカナダの小麦の最大の市場としての英國の圧倒的重要性を考へるならば、カナダが帝國特惠關稅を熱望していたことはよく理解しうる。」（本書一八六頁）

第八章は、インドの貿易構造を分析する。前の諸章で分析されたとうり、インドは英國中心の多角決済組織の中で樞軸的な地位を占めていたのであるが、それはインドの米國およびヨーロッパ向輸出の激増によるものであった。そして、この輸出の内容は、米國にはジュートお

よびジュート製品が主であり對歐輸出の中では油脂原料がもっとも重要であつた。ことに油脂原料の輸出は一九〇〇年—一九〇一年の六百万ポンドから、一九一三年—一四年には一八百万にふえ、またインドの對歐貿易収支の黒字は、九〇年代から一九一三年までに二二百万ふえたが、うち九百万は油脂原料輸出の増になった。このほかセイロンの椰子油およびコブラの輸出もある。また油脂のほか、インドは皮革、茶、シュラックをヨーロッパに輸出していた。この對歐輸出の増にともない、輸出相手國としての英國の比重は後退した。一八七〇年代にはインドの輸出のうち五〇％は英國向だったが、九〇年代には三二％となり、一九一三—一四年には二四％となつた。一八九四—九七年にはインドの輸出は年平均六五百万ポンドだったが一九一三—一四年には一七一百万となり、うち英國向は四一百万、ヨーロッパ向は五六百万、アメリカ大陸向は一九百万だった。

輸出とはまったく對照的に、インドの輸入における英國の比重はきわめて高い。七〇年代にそはの比重は八〇％以上だったが、九〇年代にも七〇％以上であつた。そしてインドの對英貿易収支の赤字は、九〇年代半ばには

約一三百万ポンドだったが、一九一一年—一九一三—一四年には五二・三百万にふえ、利子支払その他を含めると対英国国際収支の赤字は七〇百万にもなったであろう。そして英国からの輸入品のうち、最大の項目は綿表品だったが、資本財輸入についても英国は独占的地位を有している。一九〇〇年—一九一三年のあいだに英国のインド向原料輸出は一・八百万ふえたが、ドイツのそれはわずか二万ポンド、米国は一万六千ポンドしかふえていない。

第九章では、英国の帝国向輸出全体の傾向が問題とされる。一九〇〇年以後のインドへの綿製品輸出の大巾のびにもかかわらず英国の帝国向輸出ののびは停滞した。これは外国の競争によるものであるが、とくに重要なことは、単に帝国向輸出一般がのびなかったばかりではなく、ワイヤ、農業機械、電気機械、自動車、化学製品など、機械工業や新規産業の製品輸出で英国が決定的におくれつつあったことである。英国は繊維製品、靴、棒鉄、トタン、自転車、装飾品、家具、陶器などの伝統的な製品の輸出によって、外国との競争に対抗せざるをえなかった。「実際、帝国市場は、繊維製品と鉄道用材

への集中を継続することを促進たしという点で、英国の輸出にとつて一つの積極的に不幸な結果をもたらした、と論じても妥当であろう。将来にもっとも急速にのびるはずのものは、帝国よりもヨーロッパで需要のつよかった機械製品における世界貿易だったのである。」(本書二二〇頁)

とはいえ、英国は資本輸出と帝国内諸国から輸入をふやすことによつて、帝国内諸国の安定した成長を可能にしていた。もっとも帝国内諸国の工業化とアメリカのオーストラリア向輸出の増大は、決済様式の変化の必然性を暗示していたのではあるが。

八

以上で大体の紹介をおえるが、本書は、従来の研究成果を十二分に利用しつつ、独自の分析を展開しており、そのひろいヴィジョンとするどい問題意識とは、本書を貴重な成果としている。ただ、第五章「トレンドと景気変動」で、大不況期を二つに分割しているわけであるが九〇年代前半にそれまでの存在した複数の多角貿易体制が融合して単一の全世界的多角貿易体制ができたとしても、そのような融合が九〇年前後に一挙に実現したはず

はないのであつて、七〇年代以後徐々に完成に近ずいていたはずであらう。このような融合の過程と七〇年代以後の不況との関連が分析されるなれば、大不況期を二つの不況期に分解する必要はなくなるのではないだろうか。

とはいえ、本書の分析から、第二次大戦後の現在に多角貿易体制を再建することが、どれだけむづかしい問題であるかが、明らかにになる。我々は工業国相互間の多角貿易体制というようなものはいまだかつてもったことがないのであるからである。そしてそのような体制をつくりあげうるかどうか、IMF体制の将来はかかっているのではないだろうか。